

あとがき

人文科学研究所長 山本 勉

『清泉女子大学人文科学研究所紀要』第三五号には論文等十一編を収録した。著者（共同論文については筆頭著者）の内訳は本所の専任教員九名（うち所員七名）、非常勤教員二名である。

掲載論文等はすべて査読をへている。今号から査読には編集委員だけでなく、人文科学研究所員のうち今年度末で退職する教員一名をのぞく全員があたり、応募論文等十四編中、一編を「掲載不可」、五編を「条件付き掲載可」、八編を「掲載可」とした。応募者には以上の結果とともに査読者（氏名は伏せている）の所見を通知した。「条件付き掲載可」また「掲載可」の論文等の応募者には、すでにこの通知の段階で初校を送付しており、前者については、初校において査読者の提示した条件を満たす修正がなされているかどうか、同じ査読者が再査読をおこなったうえで掲載を認めた。後者すなわち「掲載可」とされた論文についても、校正段階で査読者の助言等が反映されているものと思う。厳正な査読によって、個々の論文等の、また紀要全体の水準が高められたことをよめるべきだ。きわめて短期間に査読作業の指揮を的確にたっていた永塚尋子職員、また査読にあたっていただいたすべての所員に深甚の謝意を表す。

今年度は、本誌の刊行規程また投稿受付優先順位などの規約類も公表に堪えるべく整備された。学術雑誌としての本誌の水準の保持や円滑な刊行のために不可欠のものであった。これらについ

ても佐伯編集長の労を多とするところである。

さて、大学内では近未来の大学像についてさまざまの検討が行なわれているようであるが、それらのなかで研究面に言及されることがほとんどないのはどうしたことだろうか。

「ユニバーサル段階の大学」などという言葉がとびかうが、個人的な感想をいうなら、おぞましい言葉だと思えない。大学が大衆化する状況を忌避するのではない。その状況が大学の本質を変化させるかのように喧伝するために、その言葉をことさらにつかう姿勢が受け入れがたいのだ。そもそも大学や学問の大衆化は、長いながい時間をかけて進行してきた現象であるのはだれしも認めるところだろう。現代もその延長上にあるだけのことだ。大学教員が教育者であるための前提として、ある専門分野の現役の研究者でなければならぬのは、これからも変わるはずがない。変えてはいけない。

近未来の大学を語るなかで、技術としての教育ばかりが問題にされる傾向がよいことにも抵抗と不安がある。高等教育の現場である大学で、教員がしなければならぬことの第一は、生きた研究者の研究する姿を学生に（あるいは社会の人びとに）みせることだと思ふ。その本質は時代によって変わるものではないし、大学の「レベル」によって変わるものでもないだろう。

「研究」という言葉が忘れられがちななかで、あるいは無視されがちななかで、その言葉のついた「研究所」という組織が大学内にあることは、やはりだいたいなことにはちがいない。今年もお願いしておこう。専任の先生方には、ひとりでも多く人文科学研究所の所員になっていただきたい。この研究所を守るために力を貸していただきたい。